会話の理論（2）
サール言語行為理論の限界と可能性

村　越　行　雄

はじめに

会話の理論(1)：サール言語行為理論の限界と可能性においてすでに検討した「言語行為理論の対象領域と会話の理論化」、「言語行為理論と連続性規則」、そして「関連性・話者交代と会話の理論化」に引き続いて、本稿において「聞き手の了解と反応」、そして「会話の構造と会話の理論化」を検討することにする。

聞き手の了解と反応

“Conversation” に対する批判の一つに、言語行為理論の限定された対象領域に関する評価を巡る議論がある。Searleがその対象領域から聞き手を完全に抹殺したことを非難し、聞き手側からの考察または話し手と聞き手の関係からの考察（Streeck[25]、Holdcroft[26]、Sbisa[27]）、更に会話の中の位置付けの考察（Holdcroft[28]、Sbisa[29]）をすべきであると主張するのがそれである。しかし、Searleが自らの言語行為理論の対象領域を話し手側からの言語行為遂行の解明に限定してきたことを明言し、その上で会話の理論化に言語行為理論がどこまで適用できるのかを模索していると述べている以上、彼らの批判の仕方が必ずしも妥当であるとは言いがたい。ともかく、会話の解明に取り組むには、単に話し手の発話だけでなく、聞き手側からの発話、両者の発話の関係、会話全体から見る各発話の位置付けなども当然問題にしなければならないことは事実である。そこで、彼らの批判を調べてみることにする。

言語行為理論の対象領域に関するSearleの発言は、誤解を招くものであるとHoldcroftは非難する。多分、その誤解とは、次のようなものであろう。例えば、「伝統的な言語行為理論は主として単一の言語行為に限定されるのである。」というSearleの発言から推測できることは、話し手の言語行為のみを対象にし、聞き手を排除し、それ以前の言語行為も、聞き手側からの言語行為も排除し、言語行為が遂行されるコンテクストから切り離し、言語行為の連続から成る会話の中で捉えず、結局のところ

完全に孤立無縁な話し手の言語行為が一つあるだけということになるのであろう。しかし、そこまでSearleが考えていたかどうかは極めて疑問であるが、話し手側の視点からの言語行為遂行の解明がSearleの中心課題であり、そこに重点を置きすぎた結果、それ以外のものが後退し、その存在意義がかすれてしまっていることは事実であろう。

Holdcroftは、言語行為の遂行自体にすでに話し手の言語行為以外の要素が含まれているとして、Austinの主張を引き合いに出す。最初に、Austinの「了解(uptake)」[30]を利用して、話し手が言語行為を首尾よく遂行する為には、その言語行為を聞き手が了解することが必要で、その了解があって初めて言語行為が首尾よく遂行されることになり、話し手が発話を通してどのような言語行為を遂行しているのかを聞き手が了解する為には、聞き手は話し手の発話を何らかの形で会話のコンテクストに関係付けなければならないことになるとしている。次に、Austinの「言明解説型(Expositives)」(Searleの分類の仕方とは異なり、Austinは発話(発語内行為)を判定宣言型、権限行使型、行為拘束型、態度表明型、言明解説型の五類型に分類する)[31]を利用して、発話が他の発話と関係して初めて言語行為の遂行が可能になるものがあるとしている。例えば、言明解説型に属する「否定する(deny)」、「認める(accept)」、「撤回する(withdraw)」などは、相手の発話を否定したり、認めたり、または自らの以前の発話を撤回したりする為に話し手が発話する訳で、話し手が発話を通して遂行する言語行為は、それ以前の発話を通して遂行された言語行為と関係していることを示す。最後に、言語行為の役割を理解する為には、会話の中である特定の言語行為がどのようにして決定されるのかを知らなければならないとしている。そして、Holdcroftと同様な主張をより積極的な形で言い表わすのがSbisaである。最初に、Austinの「了解」を利用して、聞き手の了解が言語行為の遂行にとって必要であるということの意味は、次のようであるとしている。聞き手が話し手の発話をどのような言語行為の遂行として受け取るのかは、聞き手の反応によって明らかになるので、聞き手の反応を調べることによって、聞き手が話し手の発話をどのような言語行為の遂行として了解するのかがわかり、その聞き手の了解を知ることによって、話し手がどのような言語行為を遂行するのかがはっきりするということである。従って、話し手の発話がどのような言語行為の遂行とみなされるのかは、聞き手の反応に

よってのみ可能になるとしている。次に、言語行為の研究と会話の研究を一つにする為に取るべき方向は、会話から個々の言語行為に進むべきであって、決してその逆ではないとしている。

以上のように、話し手の発話を通してどのような言語行為が遂行されるのかを聞き手が了解する為に、その発話がなされるコンテクストを知らなければならないとHoldcroftが主張するのに対して、聞き手の反応を調べ、そのことで聞き手の了解の内容がわかり、そのことで話し手の発話がどのような言語行為の遂行とみなされているのかがはっきりするとSbisaが主張するように、相違が存在するように見える。しかし、Holdcroftの場合、話し手側からの言語行為遂行の為に必要な聞き手の了解に対して、聞き手側からの了解の為に必要なコンテクストの理解がある訳で、Searleに欠落している（Holdcroftはそのように理解している）聞き手の了解を軸にして、聞き手本人から見る視点であり、Sbisaの場合、第三者的立場から聞き手の反応→聞き手の了解→言語行為の特定化という関係を見ているのであり、その意味での聞き手側からの視点であり、そのような見る角度の相違はあっても、聞き手の了解が言語行為遂行の重要な要素になっており、従って聞き手側からの視点の必要性を強調する点で、基本的には一致していると言える。また、会話の中で言語行為の特定化ができるとHoldcroftがするのに対して、個々の言語行為の分析によっては会話は決して理解できず、あくまでも会話を通してのみ個々の言語行為の分析が可能になるとSbisaがするのであるが、言語行為の特定化はそれ自体ではできず、その言語行為が遂行される会話という場の中でしかできないとする点で、基本的には一致していると言える。

結局、Searleの話し手側からの言語行為遂行の解明に対するHoldcroftとSbisaの聞き手側からの言語行為の特定化の解明という対立が浮かび上がってくるのである。具体例を挙げて説明すれば、次のようになる。例えば、聞き手がある先生を恐がっていることを知っている話し手が警告する意味で、「先生が来るぞ。」（“The teacher is coming.”）と聞き手に発話する時、話し手にとってはそれが警告であることは当然明らかであり、「先生が来るから気をつけろ。」（“I warn you that the teacher is coming.”）という発話をしているつもりなのである。ここまでがSearleの研究領域になる。しかし、聞き手にはその先生の姿が見えないので、恐がっている先生なのか、それとも全く別の先生なのかがわからず、ま

たその先生の姿が見えても、話し手はまだ知らないが、好きになっているかもしれないのである。聞き手側から見れば、その発話が単に先生が来るという事実を述べているだけなのか(“I state that the teacher is coming.”：陳述するという言語行為の遂行)、警告しているのか(警告するという言語行為の遂行)、好きになったその先生にぜひとも相談したいと思っている聞き手にその先生が来るという情報を与えているのか(“I inform you that the teacher is coming.”：情報を提供する(知らせる)という言語行為の遂行)、それともそれ以外の言語行為の遂行なのかをまず最初に判断しなければならず、その為には様々な情報(その発話がなされるコンテクスト、それ以前の発話、会話全体の流れなど) が必要で、その情報を利用しながら話し手の発話をある特定の言語行為の遂行として聞き手が了解することになる。そして、その了解に基づいて話し手に対して聞き手が反応するのであり、例えば、聞き手が「そう、先生が来るの。」と反応すれば、話し手の発話を陳述として了解していることがわかり、「本当、どうしよう。」と反応すれば、警告として了解していることがわかり、「よかった、先生と話してくる。」と反応すれば、情報提供として了解していることがわかる。従って、聞き手の反応を調べれば、聞き手の了解の内容がわかり、それによって話し手の発話がどのような言語行為の遂行としてみなされているのかがわかることになる。更に、話し手の発話がある特定の言語行為の遂行として成立するかどうかは、聞き手の反応によって決定されるということにつながっていく。例えば、話し手が警告のつもりで「先生が来るぞ。」と発話するが、聞き手が「よかった、先生と話してくる。」と反応すれば、話し手の発話を警告ではなく、情報提供として了解していることを示すのであり、結局話し手の発話は警告としては成り立たないことになってしまう。ここまでがHoldcroftとSbisaの研究領域となる。

Searleの場合、何故話し手の言語行為以外の要素の存在意義がかすれてしまうのであろうか。その原因と考えられるものは、話し手側からの視点であり、またSearleの表現可能性の原則(the principle of expressibility：意味されえるものは、全て言葉で表現することができる)[32]であり、その二つが結合することにある。例えば、話し手側から見れば、「先生が来るぞ。」と発話していても、「先生が来るから気をつけろ。」というつもりで発話しているのであり、その意味では、“The teacher is com-

ing.”＝“I warn you that the teacher is coming.” となり、言語行為の特定化に必要な部分 “I warn you”(警告を示す部分)がなくても自明なことで、言語行為を特定化する為に話し手の言語行為以外の要素が必要でなくなってしまう(後で述べるが、Searleの主張にもその必要性はあるが、聞き手側から見る場合と比べれば、かすれてくるのである)。そして、自分のことは自分が一番よく知っている訳であるから、話し手の発話は全て話し手にとっては同様のことが言える。つまり、話し手側から見る限り、全ての暗示的な遂行的発話（例えば、“The teacher is coming.” のことで、言語行為の特定化に必要な部分 “I warn you” を含まない発話）を簡単に明示的な遂行的発話（例えば、“I warn you that the teacher is coming.” のことで、言語行為の特定化に必要な部分 “I warn you” を含む発話）に置き換えることができるのである。Searleの用語を使用すれば、発話 “I warn you that the teacher is coming.” は、発語内的力表示部分 “I warn you” (警告という発語内の力(F)を表示する部分)＋命題内容表示部分 “the teacher is coming” (先生が来るという命題内容(p)を表示する部分) から成り、その発話自体が警告するという発語内行為(F(p))を遂行することになるのであり、発語内の力(F)を表示する部分を含まない暗示的な遂行的発話(p)が、発語内の力(F)を表示する部分を含む明示的な遂行的発話(F(p))に置き換えられることになるということである。しかし、Searleの場合、実際は第三者的立場から見て、「意味されえるものは、全て言葉で表現することができる」のであって、その表現可能性の原則に従って、全ての暗示的な遂行的発話が明示的な遂行的発話に置き換えられることになるのであるが、話し手と聞き手の関係から言えば、発話する本人である話し手にとっては簡単に置き換えることができても、聞き手にとっては発話を耳にするだけで置き換えることはできず、それに関係する様々な情報があって初めてできるのであって、その意味から言えば、話し手側から見て可能な原則であるということになるであろう。

以上のように、話し手側から見て、しかも表現可能性の原則に従うことによって、全ての発話を明示的な遂行的発話に置き換えることができることになり、Searleはその明示的な遂行的発話を対象にして分析し、言語行為理論を構築するのである。もし話し手が聞き手に対していつも必ず明示的な遂行的発話をすると仮定するならば、話し手は勿論である

が、たとえ聞き手側から見ても、言語行為の特定化は簡単に行なわれ、すぐに了解されるであろう。例えば、「先生が来るぞ。」ではなく、「先生が来るから気をつけろ。」と聞き手に話し手が発話するならば、聞き手にとってはその発話を耳にするだけで、それが警告であると了解するであろうし、その際話し手の発話以外の情報は必要ないであろう。従って、話し手側からの視点＋表現可能性の原則→明示的な遂行的発話という関係を前提にする限り、話し手の言語行為以外の要素の存在意義はなくなってしまうであろう。しかし、その存在意義が全くない訳ではなく、話し手側からの視点＋表現可能性の原則→明示的な遂行的発話に重点を置きすぎた結果、かすれてしまっていると言え、少なくともそのように解釈できるであろう。では、その存在意義はどのような形で見い出すことができるのであろうか。Searleを批判する時、HoldcroftとSbisaは聞き手の了解の欠落(具体的には、聞き手の存在、聞き手の了解、聞き手の反応などの欠落)を指摘し、Austinの主張を引き合いに出すのである。例えば、Austinは、言語行為は三つの方法で効果(effects)と関わりを持っているとして、了解の獲得(securing uptake)、効力の発揮(taking effect)、反応の誘発(inviting a response)を挙げている[33] (発語内行為の効果と発語媒介行為の効果を区別し、前者に関してそれら三つを挙げるのであるが、話を単純にする為に、今までも「言語行為」という用語だけを使用してきたので、ここでも簡単に「言語行為」を使用し、深く立ち入らないことにする)。しかし、Searleは、了解を否定したことは一度もなく、Austinの了解は彼の発語内的効果(illocutionary effect)にほぼ相当し、発語内的効果は言語行為遂行の本質的部分を成すと言うのである[34]。従って、HoldcroftとSbisaの批判は妥当性がないと言えるが、Searleの主張で聞き手の了解、聞き手の反応などの関わりが明確にされているとは必ずしも言えないことも事実であろう。そこで、聞き手の了解と聞き手の反応について調べてみることにする。なお、ここではAustinの用語を使用することにする。

言語行為の遂行を考える時、たとえ話し手側から見ても、聞き手の存在、聞き手の了解、聞き手の反応を完全に排除することは不可能である。むしろ、どのように関わっているのかが問題である。「言語行為理論と連続性規則」で説明した定義をここで再び取り上げることにする。

連続性の内在的関係の定義(2)＝話し手が自らの発話を聞き手にある特定の言語行為の遂行として了解させようと意図し、更に適切な反応を聞き手から引き出そうとしていることを了解させようと意図し、それらの話し手の意図を聞き手が了解するのであれば、その反応とみなしうるものである限り、どのような発話であれ、両者は内在的に関係し合うことになる。

すでに説明したことであるので、繰り返すことはせずに、定義(2)に基づいて聞き手との関係を述べることにする。話し手と聞き手の間の言語コミュニケーションの中で、話し手が聞き手に発話するのであるから、話し手側からの視点から見ても、聞き手と何らかの形で関わりを持つことは確かである。具体的には、話し手は自らの発話を通して遂行するある特定の言語行為を聞き手に了解させようと意図し(了解の意図)、更に適切な反応とみなしうる何らかの発話を聞き手から引き出そうとしていることを了解させようと意図するのである(内容受容了解の意図)。了解の意図に関して言えば、話し手の言っていることが聞こえなかったり、話し手の言葉の意味が理解できなかったりしては、コミュニケーションそのものが成立しなくなるので、はっきり聞こえるように話すこと、共通の言語を使用していること(例えば、お互いに日本語が理解できることなど)などは第一の前提になるが、それでも誤解の生まれる可能性はあるので、聞き手が間違いなく了解できるように話し手は意図しなければならず、その為には発話がなされるコンテクスト、それ以前の発話、会話全体の流れなどの様々な情報を考慮に入れながら発話する必要があり(聞き手が間違いなく了解できるようにする意図が最初からないのであれば、発話そのものの意味がなくなってしまう)、そこに発話に関係する様々な情報の必要性が入り込んでくるのである。例えば、「先生が来るぞ。」と話し手が聞き手に発話する時、ただ単に口から言葉を発していればいい訳ではなく、聞き手に警告として了解させようと意図し、聞き手が間違いなく了解できるようにする為に、関係のある情報を考慮に入れながら了解させようと意図するのである。聞き手が誤解するのであれば、それは話し手の責任になるであろう。もし見知らぬ人に「先生が来るぞ。」と発話しても、聞き手は何が何だかわからないであろうし、それは両者が共有する情報が全くない為で、話し手がその点を考慮に入れていないからである。

内容受容了解の意図に関して言えば、以上のことを前提にしながら、しかも更に聞き手との関わりが強まるのである。話し手の発話に対して適切な反応を聞き手から引き出そうとしていることを了解させようとする意図は、聞き手が発話の内容を受け入れてくれることを了解させようとする意図のことであり、その為には聞き手が受け入れやすいような内容を話し手が発話しなければならなず（最初から無理なこと、拒絶するようなことなどを発話することは、一般的に嫌われており、それでも発話すれば、喧嘩になったり、その場を立ち去ったりすることになる可能性がある)、関係のある様々な情報を考慮に入れなければならず、そこでは了解の意図の場合と比べて、聞き手に関する多くの情報が必要になるという意味で、より積極的に聞き手と関わりを持つことになるのである。例えば、「先生が来るぞ。」と発話する時、聞き手に警告として了解させようと意図するだけでなく、警告の内容を受け入れ、それに適した反応(例えば、「本当、どうしよう。」、「わかった。何かいい手はないかな。」、「どうしたらいいか教えてくれ。」などの発話、または「そこの店に行くから、あとはよろしく頼むよ。」、「わかった。その木の影に隠れるよ。」などの発話)を聞き手から引き出そうと望んでいることを了解させようと意図するのである。つまり、「先生が来るから気をつけろ。」と発話しているつもりであるから、それに関係する反応であれば、たとえどのようなものでも構わず、そのような反応を聞き手から引き出そうと望んでいることを了解させようと意図する訳で、単に警告として了解させようとするよりも、聞き手への気遣いがより明確な形で現れるのである。

以上の了解の意図と内容受容了解の意図は、あくまでも話し手側からの視点から見る話し手の意図の段階であって、その限りにおいて聞き手の存在、聞き手の了解、聞き手の反応が強く関わっており、発話がなされるコンテクスト、それ以前の発話、会話全体の流れなどに関する情報が考慮に入れられているのである。但し、以上述べたことがSearleによって明確にされているという意味ではなく、話し手側からの言語行為遂行の解明に限定したSearleの言語行為理論の対象領域内においても十分取り扱うことができるという可能性を述べたのである。Searle自身の主張が何であるのかは別にして、以上述べたことに関して言えば、HoldcroftとSbisaの批判は、言語行為理論の限定された対象領域では話し手の言語行為のみに限定され、それ以外の要素が全て排除されているという意味

では、妥当であるとは言えないが、聞き手側からの視点が欠落しているという意味では、妥当であると言える。そして、話し手の言語行為(たとえ単一の言語行為であっても)の解明においても、聞き手の存在、聞き手の了解、聞き手の反応との関わりは必要であり、発話がなされるコンテクスト、それ以前の発話、会話全体の流れに関する情報の存在意義は十分あるのであるが、聞き手側からの視点の欠落の為、全てが話し手の意図の段階での問題となり、聞き手との関係も話し手の意図を通しての関わりとなり(聞き手からの実際の反応を通しての関わりではなく)、関係のある様々な情報の存在意義もかすれてしまいことになると言える。更に、その存在意義は、前述のように、Searleの表現可能性の原則の為に、一層かすれてしまうことになるのである(明示的な遂行的発話の場合でも、関係のある様々な情報の存在意義がなくなる訳ではない)。

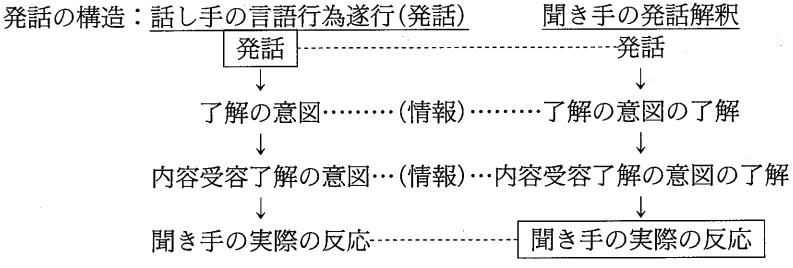
聞き手側からの視点から見ると、話し手側からの視点ではかすれてしまう情報の存在意義は、より積極的に認められるのである。というのは、聞き手の発話解釈は、発話される文の言語的意味＋発話に関係する様々な情報から成り、それらを活用しながら推論し、話し手の意図を了解することであるからである。

発話解釈の定義＝話し手の発話を正確に解釈する為には、聞き手は発話される文の言語的意味を理解し、その発話に関係のある情報を出来る限り多く入手し、それらを活用しながら推論し、話し手の了解の意図と内容受容了解の意図を了解することが必要である。

聞き手側からの発話解釈の問題は、当然のことであるが、話し手の頭(または、心)の中を覗いてみることができず、従って話し手の意図を発話される文の言語的意味の理解だけでいつも必ず了解できるとは言えないことである。話し手は自らの意図を間違いなく聞き手に了解させる為の努力をすべきであるが、たとえ努力しても、誤解が生まれることはあるだろうし、その努力をしなければ、誤解の可能性は更に高まるであろう。もし話し手がいつも必ず明示的な遂行的発話をするのであれば、その文の言語的意味の理解だけで話し手の意図を了解できるであろうが、それでも誤解の可能性は十分考えられるのである(例えば、「先生が来るから気をつけろ。」と発話しても、それが嘘、勘違い、冗談、比喩などかもしれないのである)。実際の会話では、むしろ暗示的な遂行的発話の方

が一般的であり、しかも発語内の力だけでなく、命題内容も明示されない発話がされることがよくあるのである（例えば、「どう。」、「今やっているよ。」などの文の言語的意味の理解だけでは、言語行為の特定化も、命題内容の特定化もできないのである）。従って、発話解釈にとって最も重要なことは、話し手の発話に関係のある情報を出来るだけ多く入手し、それらを活用しながら推論することによって話し手の意図を了解することで、誤解を避け、コミュニケーションを円滑に行なう為に、発話がなされるコンテクスト、それ以前の発話、会話全体の流れなど、発話解釈に必要な様々な情報が不可欠で、その存在意義は極めて大きいと言える。例えば、了解の意図の了解の場合、「先生が来るぞ。」という発話を聞く時、その文の言語的意味を理解することは前提であるが、それだけでは不十分で、前述のように、陳述、警告、情報提供など、様々に受け取れる可能性があり、警告として了解させようとする話し手の意図を間違いなく了解し、発話を通して遂行される言語行為を警告として正確に特定化する為には、その発話に関係のある情報が必要不可欠で、その情報に基づいて推論しなければならないのである。内容受容了解の意図の了解の場合、「先生が来るぞ。」という発話を聞く時、警告として了解させようとする話し手の意図を了解し、警告として特定化できるだけでなく、警告の内容を受け入れ、それに適した反応を望んでいることを聞き手に了解させようと意図していることを了解し、何らかの形で反応しようとしなければならないのである。そこでも様々な情報は必要不可欠で、それに基づいて推論し、聞き手からの反応を望んでいることを知り、何らかの反応をしようとするのである。

以上の話し手側からの視点と聞き手側からの視点をまとめれば、具体的に言えば、連続性の内在的関係の定義(2)と発話解釈の定義を組み合わせれば、次のようになる。



話し手側から見ると、発話を通して遂行するある特定の言語行為を聞き手に了解させようと意図し、更にその特定の言語行為の内容を受け入れさせ、それに適した反応を聞き手から引き出そうと望んでいることを了解させようと意図し、そのことによって聞き手から反応を実際に引き出そうとし、そのことで自らの目的を達成させようとするのであり、了解の意図と内容受容了解の意図が言語行為遂行の本質的部分を成すことになる。聞き手側から見ると、発話される文の言語的意味が理解できることを前提にして、発話を通して遂行されるある特定の言語行為を了解させようとする話し手の意図を間違いなく了解し、そのことで正確に言語行為を特定化し、更にその特定の言語行為の内容を受け入れさせ、それに適した反応を引き出そうと望んでいることを了解させようとする話し手の意図を了解し、その上で実際に何らかの形で反応しようとするのであり、了解の意図の了解と内容受容了解の意図の了解が発話解釈の本質的部分を成すことになる。そして、発話の段階と実際の反応の段階は、表面に出る部分であるのに対して、その中間の段階は、話し手と聞き手の頭の中で行なわれる過程で、表面には出てこない部分になる。従って、話し手の発話と聞き手の反応だけが言葉で言い表わされる部分(図のなかの□の部分)で、聞き手は話し手の発話を手掛かりにして話し手が何を意図しているのかを推論し、話し手は聞き手の反応を手掛かりにして聞き手がどのように了解しているのかを知るのであるが、そこで重要となるのが表面に出てこない本質的部分(図の中の話し手の意図と聞き手の了解の部分)である。話し手と聞き手の間の言語コミュニケーションが円滑に行なわれる為には、その本質的部分が要となり、そこに発話に関係のある様々な情報の存在意義が見い出されるのである。話し手が自らの意図を聞き手に間違いなく了解させるには、様々な情報を考慮に入れなければならないし、聞き手が話し手の意図を正確に推論するには、出来るかぎり多くの情報を入手しなければならないからである。但し、推論する為の材料として情報は重要な位置を占めるので、聞き手にとっての方が情報の存在意義は大きいものとなる。そして、情報とは、あくまでも話し手と聞き手の両者が共有するものでなければならず、たとえどんなに多くの情報を話し手が考慮に入れても、またたとえどんなに多くの情報を聞き手が入手しても、それが両者の共有する情報でない限り、コミュニケーションは成り立たなくなってしまう。

発話の構造の図において、内容受容了解の意図の段階までが話し手の言語行為遂行の範囲(意図構造)となり、内容受容了解の意図の了解の段階までが聞き手の発話解釈の範囲(了解構造)となり、聞き手の実際の反応はその範囲外になる。そして、どのような発話をするのかは話し手側の責任であるが、その発話に対して、反応するかどうか、反応するにしても、どのような反応をするのかは聞き手側の問題であり、聞き手側の責任になる(話し手の意図を了解した上でのことであるが、もし話し手の意図が了解できない時は、話し手または聞き手、あるいは両者の責任になる)。その発話から反応への過程に関して言えば、まず第一に、発話「先生が来るぞ。」を使用すれば、警告として聞き手に了解させようとする話し手の意図を聞き手が了解すれば、話し手の発話は警告として成り立つが、もし聞き手が了解しなければ(何を言っているのか全くわからない時、陳述、情報提供などと取り違える時)、警告としては成り立たないことになり(簡単に言えば、警告しているつもりでも、警告していることにはならない)、次に、警告の内容を受け入れ、それに適した反応を聞き手から引き出そうと望んでいることを了解させようとする話し手の意図を聞き手が了解しても、それは話し手の願望を了解することで、その後どのように反応するのかは聞き手の問題で、願望に沿う形で反応することもあり(例えば、恐くなって、「本当、どうしよう。」などと発話したり、逃げだしたくなって、「そこの店に行くから、あとはよろしく頼むよ。」などと発話する)、また願望に沿わない形で反応することもあり(例えば、拒絶するつもりで、「別に、恐くなんかないよ。」などと発話したり、無視するつもりで、「別に、関係ないよ。」などと発話する)、願望に必ずしも沿う必要はなく、話し手の発話に対する反応であれば、どのような発話でも構わないことになる(聞き手が了解の意図は了解するが、内容受容了解の意図は了解しないということは考えにくく、前者が了解できなければ、後者も了解できず、また前者が了解できれば、後者も了解できるという関係で、時間的なずれがある訳ではなく、同時的に行なわれるもので、従って話し手の二重の意図であり、聞き手の二重の了解であると言える)。つまり、発話が警告として成り立つかどうかは、あくまでも了解の意図と了解の意図の了解の段階での問題であって(聞き手が話し手の意図を了解すれば、警告として成り立ち、了解しなければ、警告としては成り立たないことになる)、聞き手の実際の反応の段階での問題

ではないのであり(聞き手が発話を警告として受け入れることを拒絶したり、無視するような発話をしても、それとは関係なしに、発話は警告として成り立つことになる)、聞き手がどのような反応をするかどうかは、聞き手本人の問題で、聞き手の実際の反応の段階での問題であって(聞き手が話し手の了解の意図と内容受容了解の意図を了解する限り、警告に対する反応とみなしうるものであれば、どのような反応でもよく、一見関係のないような反応でも構わず、それは全て聞き手自身の問題となる)、内容受容了解の意図と内容受容了解の意図の了解の段階での問題ではないということである(警告の内容を受け入れてくるような反応を話し手が望んでいることを聞き手が知るだけで、それに対して聞き手が実際にどのような反応をするのかとは別問題となる)。従って、言葉で言い表わされる 発話 と 聞き手の実際の反応 の関係だけを見ると、発話に対して聞き手が受け入れるのか、それとも無視・拒絶するのかによって、発話が警告として成り立つかどうかが決定されてしまうような印象を与えてしまうが、その関係の背後には上記の発話の構造が存在し、それが発話の理解にとって重要になるのである。

発話の構造は、上記の図のように、話し手側と聞き手側のそれぞれからの視点と両者の相互関係を明らかにするものでなければならないだけでなく、会話の中の一部として会話全体の流れとの関係で位置付けられるべきものであるが、後者に関しては、今まで述べてきたもの以外の多くの要素が絡み合っており、より複雑な構造になるので、ここでは扱わないことにする。次に、発話の構造との関係でSearle、Holdcroft、Sbisaのそれぞれの意見を比較してみることにする。Searleの場合、話し手側からの視点で、了解(彼の発語内的効果)が言語行為遂行の本質的部分を成すと言っているが、それは話し手の了解の意図を意味するもので、話し手の内容受容了解の意図については曖昧なままにされており、その為に聞き手の実際の反応と聞き手の内容受容了解の意図の了解の関係が明確にされず(前述のような区別がない)、それが発話と反応の関係についての誤解を生む結果になるのである。HoldcroftとSbisaの場合、聞き手側からの視点の重要性を強調し、それが話し手と聞き手の関係の中の発話、更に会話全体の流れの中の発話を理解する為の中心になるとしているが、聞き手の了解(了解の意図の了解と内容受容了解の意図の了解の関係が曖昧である)と聞き手の実際の反応の関係が曖昧なままにされて

いるのである。

特に、Sbisaは聞き手の実際の反応から話し手の言語行為遂行を調べることを強調するが[35]、その点を見ることにする。例えば、「先生が来るぞ。」という発話(警告)に対する聞き手の実際の反応を調べると、「よかった、先生と話してくるよ。」は、情報提供と取り違えていることを表すが(聞き手がその先生を恐がっていると話し手は思っていたが、実は聞き手はその先生が好きになっている為に、つまり両者が共有していると思っていた情報が実はそうでなかった為に、取り違えが生じたのであり、従って了解の意図の了解の段階での問題となる)、正確に警告として受け取っていることを表すとも言える(了解の意図の了解の段階での問題はなかったが、実際の反応の仕方が誤解を生み出す原因となり、従って聞き手の実際の反応の段階での問題となる)。また、「そう、先生が来るの。」は、陳述として取り違えていることを表すが(話し手は聞き手の恐がっている先生のことを言っているのであるが、先生の姿が見えない聞き手は別の先生と思っている為に、つまり両者が同一の情報を共有していない為に、取り違えが生じたのであり、従って了解の意図の了解の段階での問題となる)、正確に警告として受け取っているが、ただ無視する態度を表しているとも言える(了解の意図の了解と内容受容了解の意図の了解の段階での問題ではなく、聞き手の実際の反応の段階での問題で、ただ受容ではなく、無視の反応をしているだけである)。また、「どうしたらいいか教えてくれ。」は、警告として受け取っていることを表すが(了解の意図の了解と内容受容了解の意図の了解の段階での問題ではなく、聞き手の実際の反応の段階での問題で、受容の反応をしている)、助言として取り違えていることを表すとも言える(聞き手はその先生と仲直りをしたいと思っていたが、そのことを話し手が知らない為に、つまり両者が同一の情報を共有していない為に、取り違えが生じたのであり、従って了解の意図の了解の段階での問題となる)。以上のように、聞き手の実際の反応を調べても、了解の意図の了解の段階での問題なのか、それとも内容受容了解の意図の了解の段階での問題なのか、それとも聞き手の実際の反応の段階での問題なのかが明確に区別されず、曖昧にされていると言えるのである。

結局、Searleの話し手側からの視点による言語行為遂行の解明だけでは不十分であり(Searle自身も勿論承知している)、またHoldcroftと

Sbisaの聞き手側からの視点による聞き手の了解と聞き手の反応の解明だけでも不十分であり、両者の相互関係の解明が必要で、またそこでの情報の果たす役割も明確にしなければならず、しかも発話の連続体としての会話を理論化する為には、その他の様々な要素も検討しなければならないのである。しかし、会話全体ではなく、発話間の関係に限って言えば、上記の発話の構造は、SearleのHoldcroftとSbisaの主張の中のしばしば批判の対象になる問題点を勿論全てではないが、ある程度取りのぞくことを可能にしてくれるであろう。

会話の構造と会話の理論化

"Conversation" の中で、会話の構造が今だに解明されていないとして従来の会話理論を批判するのであるが、Searleにとっての会話の構造そして会話の理論とは、一体どういうものなのであろうか。残念ながら、Searleは具体的には明示しておらず、ただ手掛かりを提示するだけで終えているのである。そこで、会話の構造の解明と会話の理論化の為の手掛かり(Searleの示す手掛かりのみならず、その他の手掛かりも含めて)がどのようなものであるのかをここで簡単に調べてみることにする。

その前に取り上げなければならないのが、「談話(discourse)」と「会話(conversation)」の用語上の問題である。Juckerは談話の幾つかある類型の中の一類型として会話を位置付け、その上で会話を構造としてではなく、過程として特徴づけ、談話のその他の類型には構造が存在するものがあるとし[36]、Holdcroftは「会話」を包括的な用語(例えば、討論、交渉、尋問)としての使用と非包括的な用語(例えば、気取らない話)としての使用に区別し[37]、「談話」を使用せずに、「会話」だけで済ますという具合に、「会話」という用語によって扱われる内容が研究者によって異なっているのである。そして、Searleの場合は、Juckerの過程としての会話の指摘に対して、それを受け入れながらも、過程の結果として生じる構造を対象として扱うとしていること[38]から推測すれば、談話の一類型として会話を考えているように思えるが、"Conversation" の中では、Juckerの会話には入らない政治会見などを会話の例として説明していること[39]から推測すれば、談話一般として会話を考えているように思われるし、また歯医者に予約する女性、道で立ち話をしている余り親密でない二人、哲学演習、バーで女性を誘おうとしている男性、夕食会、日

曜日の午後に家でテレビを見ながら話をしている家族、小企業の重役会、患者に病状を尋ねている医者などの話を取り上げて、全て会話と呼べるのであろうかと疑問を投げ掛けていること[40]から推測すれば、談話一般として会話を考えていないように思われるし、いずれにせよ「会話」を厳密な意味で使用しているとは言えないが、ただ談話一般に近い意味で使用しているように思われる。しかし、ここでは用語上の問題に立ち入ることはせずに、特に明記しない限り、今までと同様に「会話」を談話一般に近い意味で使用していくことにする。

まず最初に、Searleとは異なる視点から従来の会話理論を批判するJuckerとRouletが示す手掛かりを見ることにする。"Conversation: Structure or Process?" におけるJuckerの談話の分類の仕方を見ると、談話の類型は幾つあるのか、各類型間の境界線はどこで引かれるのか、各類型の定義と具体的内容は何であるのか、その他の談話の分類(または、分類法)に関係する問題は取り上げられておらず、ただ六つの基準に基づいて[41](例えば、過程志向型または構造志向型、制約の強弱など)、全く制約を受けない談話(会話)と強く制約を受ける談話(法廷尋問、政治インタビュー)が談話の両極端の類型として挙げられ、その間に様々な談話が入れられるとされている。つまり、談話の両極端の類型の間は、六つの基準に従って談話の類型化ができ、順番に並べられるということを提案しているのがJuckerで、具体的な分類結果が明示されている訳ではないのである。しかし、その談話の類型化の試みは、興味深い結果をもたらすと言える。例えば、いわゆる「会話分析」に属する研究者は、全く制約のない自然な会話を研究対象にする為、隣接ペア(adjacency pairs：例えば、Levinson)、優先応答体系(preference organisation：例えば、Pomerantz)、修復機構(repair mechanisms：例えば、Owen) などのかなり局所的現象に研究を集中させ、いわゆる「談話分析」に属する研究者は、談話全体の一般構造を研究する為に、学校の授業(例えば、Sinclair & Coulthard)、精神療法の診療(例えば、Labov & Fanshel)、政治インタビュー(例えば、Blum-Kulka, Jucker)などのより制約の強い談話の類型を研究対象として選ぶのであり、そこには談話の中のどの類型を研究対象として選ぶかによって、研究者は全く異なる結論に到達するという関係が存在しているとJuckerは言うのである。つまり、談話の中のある類型を研究対象にすれば、構造化ができず、局所的現象の研究

に終始するしかなく、またある類型を研究対象にすれば、構造化が容易にできるという具合に、他の類型とは共有しえない各類型に固有な性質が理論化の方向性を決定付けてしまっているのが現状で、従って今までの談話または会話に関する理論は全て同様の限界性を抱えており、ある特定の類型に適用できても、他の類型には適用できず、談話全体の一般理論としてみなされないということを指摘しているのである。そのようなJuckerの意見は、従来の理論の限界性を研究対象の限界性によって指摘しているという意味だけでなく、談話の類型化の重要性を強調しているという意味でも、興味深いものであると言えよう。

Juckerとは異なる視点から従来の理論の限界性を指摘するのがRouletである[42]。Rouletによれば、現時点での会話研究(Juckerの会話よりもより一般的な意味で使用している)では、会話全体の構造についてはほとんど明らかにされていないのが現状で、むしろ会話の構成要素である話のやりとり(exchange)の構造の解明が先決問題であり、それが会話全体の構造の解明への第一歩であるということになる。つまり、会話全体の構造の解明という点から言えば、会話に関する従来の理論は適切さを欠いているということであり、むしろ話のやりとりの構造に関する理論と呼ばれるべきものであるということになる。事実、研究者が挙げる例は、会話の一部の発話のやりとり(その多くは、限られた数の発話のやりとりである)であって、そこから簡単に会話全体の構造を引き出すのは、かなり無理があると言えるかもしれない。その意味では、Juckerの場合と同様に、従来の理論の限界性が研究対象の限界性から生まれてくることを指摘し、直接会話全体からではなく、会話の構成要素である話のやりとりから取り組むべきであることを強調している点で、興味深いものであると言えよう。

JuckerとRouletの示す手掛かりとは、会話と各類型の区別、そして会話と話のやりとりの区別が必要で、その混乱が会話理論の限界性を生む出す原因の一つになっているということである。そのような区別の必要性は当然のことで、実際の会話を解明するのに、その一部だけを取り出して明らかにしても、それだけでは十分とは言えないからである。では、実際の会話は、どのように構成されているのであろうか。なお、すでに「関連性・話者交代と会話の理論化」で取り上げた会話の基本式を使用することにする。

(1) 会話の基本式：$C\{U^1 \rightarrow U^2 \rightarrow U^3, U^4, U^5 \rightarrow U^6, U^7, U^8 \rightarrow U^9 \rightarrow U^{10} \rightarrow U^{11}, \ldots \rightarrow U^n\}$

(Cは会話、Uは発話、→は関連のある発話の連鎖を表すものとする。)

実際の会話では、会話は発話の連続体として特徴づけることができるが、発話の連続体がいつも必ず全て関連のある発話の連鎖として一つにつながっている訳ではなく(一つの話題について最初から最後まで話す場合)、幾つかの話題のそれぞれについてまとまりのある話をする場合もあり、ある話題について話し、急に別の話題に移り、また元の話題に戻ったりする場合もあり、また会話の中で前後に全く関係のない発話が何度か挿入される場合もあり、従って短い発話の連鎖(例えば、$U^5 \rightarrow U^6$)、長い発話の連鎖(例えば、$U^8 \rightarrow U^9 \rightarrow U^{10} \rightarrow U^{11}$)、連鎖を形成しない挿入的な発話(例えば、$U^4$)の様々な組み合わせとしてあることになり、会話の基本式はそのような発話の連続体を表すものである。上記の会話の基本式は、実際の会話の原型とも言うべき会話構成の基本形を式にして表したものであるが、その会話の基本式に会話の関与者を取り入れて{　　}の中の組み合わせを変えることによって幾つかの基本形が作られ、それらによって全ての会話が表されることになるのである。しかし、会話の基本式が直ちに会話の構造の解明、会話の理論化につながる訳ではないが、その為の一つの手掛かり(または、出発点)になると思われる。そこで、会話の関与者を取り入れた会話構成の基本形を簡単に調べてみることにする。

(2)：$C\{U^1, U^2, U^3, U^4, U^5, \ldots U^n\}$

(3)：$C\{1U^1 \rightarrow 1U^2 \rightarrow 1U^3 \rightarrow 1U^4 \rightarrow 1U^5 \rightarrow \ldots 1U^n\}$

(Uの前の数字は人を、Uの後の数字は発話の順番を表す。例えば、$1U^1$は、最初の人が最初の発話をすることを、また$2U^2$は、二人目の人が二番目の発話をすることを表す。そして、$1U^1 \rightarrow 2U^2$は、最初の人が最初の発話をし、それに対する反応として二人目の人が二番目の発話をし、二つの発話が関連のある発話の連鎖であることを表す。)

(2)と(3)は、会話から除外されるべきものである。(2)の場合、会話の関与者が二人であれ、それ以上であれ、個々の発話はそれぞれの発話者にとっては関連性があるとしても、相互には関連性がなく、それぞれの関与者が全く関係ないことを勝手に発話するだけで、会話と呼べるようなものではない。(3)の場合、一人の人が相手に向かって一方的に関連のあ

る発話を連続して行い、それが一つの連鎖を形成することを表し、講演、演説、授業・演習、教会の説教などのように、一人が多くの聴衆に向かって一方的に話すような例が挙げられるが、それらは会話と呼べるようなものではない。しかし、授業・演習の場合、単に先生が一方的に講義するだけでなく、学生からの質問に答えて授業を進めることもあり、その意味から言えば、(4)に近づく可能性はある。

(2)と(3)を除く会話の構成は、どうであろうか。話を単純にする為に、二人の間で会話を行なうこと、更に会話の関与者が発話を一度に一回しか行なわないことを前提にすることにする。

(4)：$C\{1U^1 \rightarrow 2U^2 \rightarrow 1U^3 \rightarrow 2U^4 \rightarrow 1U^5 \rightarrow 2U^6 \rightarrow \ldots U^n\}$

(5)：$C\{1U^1 \rightarrow 2U^2, 1U^3, 1U^4 \rightarrow 2U^5 \rightarrow 1U^6, 2U^7, 1U^8 \rightarrow 2U^9 \rightarrow 1U^{10} \rightarrow 2U^{11}, \ldots U^n\}$

(6)：$C\{1U^1 \rightarrow 2U^2, 1U^3, 2U^4 \rightarrow 1U^5 \rightarrow 2U^6, 2U^7, 1U^8 \rightarrow 2U^9 \rightarrow 1U^{10}, 2U^{11} \rightarrow 1U^{12}, \ldots U^n\}$

(4)は、最初の人が最初の発話を行い、それに対する反応として二番目の人が発話し、またそれに対する反応として一番目の人が発話し、またそれに対する反応として二番目の人が発話するという具合に、二人が相互に関連のある発話をし、一つの発話の連鎖を形成することを表す。例えば、最初からある目標が設定され、その目標に向かって会話が進められ、しかも最初から最後まで同一の話題について会話が進められ、会話の過程においては、話者交代が規則正しく行なわれるが、正式の討論、交渉などのように、会話の関与者が対等な立場にいて会話を行なう場合もあれば、法廷尋問、医者の診察、様々なインタビュー、情報入手・情報提供の目的を持つ人との簡単な会話(見知らぬ人との会話の場合、道を聞いたり、受付で尋ねたりすることなどが考えられ、知り合いとの会話の場合、急いで時間がない時に尋ねたりすることなどが考えられる)などのように、会話の関与者の中の一人が絶えず中心になって会話を押し進め、目標を達成しようする場合もあり、また別の角度から見れば、法廷尋問、正式の討論などのように、同一の話題で会話が進められる可能性が最も大きい場合もあれば、交渉、医者の診察、様々なインタビューなどのように、別の話題が挿入される可能性が大きい場合もあり、法廷尋問と正式の討論以外のものは、(5)または(6)に近づく可能性があることになる(但し、主たる話題についての話が会話の大部分を占め、非常

に長い発話の連鎖を形成するが、それ以外の挿入される話題についての話は、短い発話の連鎖を形成するにすぎない)。

(5)と(6)は、幾つかの発話の連鎖から成り、幾つかの話題で会話が進められるが、(5)の場合、各連鎖の最初の発話が必ず一番目の人が行なうことを表し、(6)の場合、各連鎖の最初の発話が会話の関与者のいずれか一方が行なうことを表す。例えば、知り合いへの依頼・要請などのように、最初からある目標が設定され、その目標に向かって会話が進められるが、直線的に向かうのではなく、幾つかの話題を織り込みながら最終的に目標を達成しようとする場合もあれば、偶然会った知り合いとの会話などのように、最初から何の目的も持たずに、次から次へと話題を変えながら会話が進められる場合もある。なお、(5)と(6)には連鎖を形成しない挿入的な発話が含まれているのに対して、(4)には含まれていないのは、挿入的な発話が全く存在しないという意味ではなく、(5)と(6)に比べて可能性が少ないというだけである。Searleの例で言えば[43]、会話の途中で突然「気をつけて。シャンデリアが君の頭に落ちてくる。」と発話することが、連鎖を形成しない挿入的な発話となるが、そのような発話の可能性はいつでも、どこでもある訳で、先の法廷尋問の途中でも、地震、火災などが起きて、危険を知らせる発話を突然することは、可能性としては十分考えられるのである。しかし、知り合いとの会話では、危険を知らせる挿入的な発話以外にも、例えば、あることを思い出して言いかけて、途中で止めることはよくあることで、そのような連鎖を形成しない挿入的な発話の可能性は、(5)と(6)での方が遙かに大きく、またそれが(5)と(6)の特徴の一つとも言えよう(なお、挿入的な発話に対して、その反応として相手が何らかの発話をすれば、それで発話の連鎖を形成することになり、その意味では、純粋に挿入的な発話の可能性は少ないものになろう)。

以上のように、実際の会話の原型と言える会話構成の基本式(1)を軸にして、連鎖を形成しない挿入的な発話だけから成る発話の連続(2)、そして一人による一方的な発話の連鎖だけから成る発話の連続(3)を両極端として会話から除外し、複数の人による発話の連鎖と連鎖を形成しない挿入的な発話の組み合わせとしての会話を、一つの長い発話の連鎖から成る発話の連続の基本形(4)(挿入的な発話は、あくまでも可能性として存在する)と複数の発話の連鎖(長い連鎖と短い連鎖)と連鎖を形成しない挿入的な発話から成る発話の連続の基本形(5)と(6)によって表すことができ

るのである。そして、あくまでも(1)を会話構成の基本式とすることで、その構成要素である発話の連鎖と連鎖を形成しない挿入的な発話を区別することができ、前者を話のやりとりとすることで、会話を単なる話のやりとりから構成されているのではないことを明確にすることができるのであり、また(4)、(5)、そして(6)の基本形を具体的な会話に適用させる過程で更に詳細に分析し、会話の各類型を見つけ出す為の手掛かりにすることができることになるであろう。

次に、Searleの示す手掛かりを見ることにする。最初に、"Conversation" のIとIIにおいて、会話に関する理論(例えば、隣接ペア、Griceの関連性、Sacks, Schegloff & Jeffersonの話者交代)の批判を通して、最終的に言語行為と会話の構造的類似性の否定という結論に到達するのである[44]。その理由は、言語行為には特定の目的があるのに対して、会話にはそのような特定の目的が欠落していることであるとSearleは言うのである。例えば、友人から本を借りる時に、「明日までには必ず返すよ。」と約束する場合、明日までに本を返す義務を負うことが話し手にとっての発話(約束という言語行為の遂行)の目的であり、聞き手がそれを受け入れれば、話し手はその義務を実際に負うことになる(但し、義務を実際に負うことと義務の内容を実行することは本来異なるものなので、明日になって話し手が本を返さなくても構わない)。しかし、もし話し手が最初から明日までに本を返す義務を負うつもりなど全くないのに、「明日までには必ず返すよ。」と言えば、それは約束していることにはならないことになる。従って、明日までに本を返す義務を負うこと(厳密に言えば、義務を負う意図を話し手が持っていること)は、約束が約束として成り立つ為の本質的条件であり、つまり言語行為がある特定の言語行為として成り立つ為の本質的条件であり、その意味で、約束という言語行為の内に組み込まれている内在的な目的ということになる。それがSearleの言う言語行為の特定の目的であり、そのような目的を内に組み込む構造が内在的な構造と呼ばれることになる。そして、全ての言語行為が断定型言語行為、行為指示型言語行為、行為拘束型言語行為、感情表出型言語行為、宣言型言語行為などに分類され、各類型にはそれぞれに固有な共通の言語行為の目的があり、各類型に属する個々の言語行為は属する類型の目的を共有することになり、結局個々の言語行為は全て言語行為の目的を持ち、内在的な構造を持つことになる。それに対して、会話の場

合、言語行為の目的のような特定の内在的な目的が存在せず、言語行為の構造のような内在的な構造が存在しないことになる。以上のことから、言語行為と会話の構造的類似性の否定という結論に到達するのである。しかし、そのことは会話の構造の存在を否定することにはならないとSearleは言うのである。

そこで、"Conversation" のIIIにおいて、会話の構造を説明する為に必要な概念として「共有の意図性(shared intentionality)」(または、「集合的意図性(collective intentionality)」)と「バックグラウンド(background)」を導入するのであるが、それらの概念を使用して会話の構造を解明することはせずに、単なる示唆程度で終わっているのである。共有の意図性を例に挙げれば、会話とは、二人の人が出会って会話を始めれば、二つの個々の活動があるというようなものではなく、むしろ一つの共同活動が始まることを意味するようなもののことであって、従って複数の人によって共有される集合的な行動であり、純粋に社会的な現象のことであるが、個々の人の意図性に限定して説明しようとする限り、その現実を見失うことになり、会話の関与者全員によって共有される集合的意図性によって初めて説明されるようなものであるということになる。その意味から言えば、個人の意図性に基づく言語行為の構造と会話関与者全員によって共有される集合的意図性に基づく会話の構造の間には、個々の人の意図性を単純に加えることによっては(例えば、A and B and C and D... という具合に、会話関与者個人の意図性を足算しても)集合的意図性が得られないという理由で、大きな隔たりが存在することになるのである。しかし、Searleはそれ以上具体的に発展させることはしないのである。

"Conversation" の中でSearleが示す手掛かりは、言語行為と会話の構造的相違(従って、言語行為理論をそのままの形で会話に適用することができないこと)、集合的意図性、そしてバックグラウンドということになる。そして、"Conversation Reconsidered" では、言語行為と会話の構造的類似性の否定を再確認し、Jucker, Dascal, Rouletなどの集合的意図性に関する意見を断片的に取り入れるのであるが、やはり具体的に会話の構造を解明し、会話の理論化を実行することはしておらず、最後に問題提起をして終えるのである。つまり、会話を構成する個々の言語行為の内容と意味以外に付け加えるべきものがないにもかかわらず、それら

だけによっては会話全体を表すことができないという問題である。先の個人の意図性→会話の集合的意図性への移行が直ちにできないのと同様に、個々の言語行為→会話全体への移行も直ちにできないことを意味し、会話の個々の関与者の意図性が全て明らかになっても、会話関与者全員の集合的意図性が明らかにならないように、また会話を構成する言語行為が全て明らかになっても、会話全体が明らかにならないように、両者の間には大きな隔たり（単純に個々を足算しても全体が得られないこと）が存在し、それが会話の理論的説明の難しさを生み出す原因になっていると言えるのであろう。

以上述べてきた手掛かりは、従来の会話理論が抱えている限界性・不適切さを乗り越えて、会話の構造を解明し、会話の理論を構築しようとする試みの現れであり、それらの手掛かり（または、それ以外の手掛かり）を利用しながら会話の理論化が具体的にどのような方向に向かって進められていくべきかは、今後の重要課題として残されているのである。

最後に

本稿では、*(On) Searle on Conversation*で展開されている会話理論に関する議論を取り上げ、特にSearleの論文を中心に検討し、Searleの言語行為理論が抱える限界と可能性、またそれとの関係で会話の理論化の可能性を探り出そうと試みてきた。そして、会話の理論化の可能性はあるが、むしろその難しさが浮き彫りにされる結果になった。勿論、それは言語行為理論の視点から見た結果であって、別の視点からの会話の理論化の可能性も同様であることを意味する訳でない。そのことはともかくとして、人々の言語コミュニケーションが益々重要になってきている現在、時代の要請もあり、言語学のみならず、言語哲学、心理学、社会学、人類学などの分野で会話が様々な形で取り組まれているのである。言語哲学を例に取れば、語句段階での研究成果として、指示、前提などに関する多くの一般理論が生み出され、また発話段階での研究成果として、言語行為、会話含意、関連性などに関する多くの一般理論が生み出されてきたのであり、そして現在は発話の集合体としての会話の段階での理論化を推し進め、会話の一般理論を構築しようと試みているのである。そして、大きな課題である会話の構造の解明と会話の理論化に対して一つの糸口を見い出したのがSearleであると言える。

注

＊本稿ではJohn R. Searle et al., *(On)Searle on Conversation* (Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 1992)を使用した。*(On)Searle on Conversation*は、以下の論文から構成されている。
Herman Parret and Jef Verschueren, "(On) Searle on Conversation:An Introduction", pp. 1-5.
John R. Searle, "Conversation", pp. 7-29.
Julian Boyd, "The Act in Question", pp. 31-34.
Marcelo Dascal, "On the Pragmatic Structure of Conversation", pp. 35-56.
David Holdcroft, "Searle on Conversation and Structure", pp. 57-76.
Andreas H. Jucker, "Conversation: Structure or Process?", pp. 77-90.
Eddy Roulet, "On the Structure of Conversation as Negotiation", pp. 91-99.
Marina Sbisa, "Speech Acts, Effects and Responses", pp. 101-111.
Emanuel A. Schegloff, "To Searle on Conversation: A Note in Return", pp. 113-128.
Jurgen Streeck, "The Dispreferred Other", pp. 129-136.
John R. Searle, "Conversation Reconsidered", pp. 137-147.

(25) Jurgen Streeck, "The Dispreferred Other".
(26) David Holdcroft, "Searle on Conversation and Structure", pp. 59-68.
(27) Marina Sbisa, "Speech Acts, Effects and Responses", pp. 101-102, pp. 107-108.
(28) David Holdcroft, "Searle on Conversation and Structure", p. 62, pp. 65-68.
(29) Marina Sbisa, "Speech Acts, Effects and Responses", p. 110.
(30) J. L. Austin, *How to Do Things with Words* (Massachusetts: Harvard University Press, 1975), p. 117.
(31) J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, pp. 151-164.
(32) John R. Searle, *Speech Acts* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976), p. 68.
(33) J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, pp. 116-118.
(34) John R. Searle, "Conversation Reconsidered", p. 140.
(35) Marina Sbisa, "Speech Acts, Effects and Responses", p. 101.
(36) Andreas H. Jucker, "Conversation: Structure or Process?", pp. 79-89.
(37) David Holdcroft, "Searle on Conversation and Structure", p. 71.
(38) John R. Searle, "Conversation Reconsidered", pp. 138-139.
(39) John R. Searle, "Conversation", pp. 26-28.
(40) John R. Searle, "Conversation", pp. 20-21.
(41) Andreas H. Jucker, "Conversation: Structure or Process?", p. 85.
(42) Eddy Roulet, "On the Structure of Conversation as Negotiation", p. 94, p. 98.
(43) John R. Searle, "Conversation", p. 14.
(44) John R. Searle, "Conversation", p. 20.